

第3回保存科学研究集会

埋蔵文化財センター

第3回保存科学研究集会は、1987年2月9～10日間の2日間にわたり、埋蔵文化財センター研修棟で開催された。全国の保存科学関係者をはじめ、関連分野から60名が参加した。

今年度は、保存科学研究集会開催の最終年度にあたるので、すでに実用化されている保存科学研究の成果を再検討し、関連する情報の交換を目的とした。したがって、研究発表だけにとどまらず、特別講演や保存技術を具体的に検討するセッションも取り入れることになった。

第1日目は、鈴木嘉吉所長の開会挨拶に続き、江本義理・東京国立文化財研究所・保存科学部長による特別講演『古墳壁画の保存について』が行われた。高松塚古墳をはじめとする国内における古墳の保存科学的諸問題にふれ、さらに、イタリア・中国等に於ける国外の現状についても紹介された。ひきつづき、『撥水性シラン処理石材からの水の蒸発と塩結晶による破壊挙動』(西浦忠輝)、『石造遺構の保存問題』(沢田正昭)、『青銅製品の保存処理の現状と課題』(内田俊秀)の3件の研究発表が行われた。

この中で、西浦は磨崖仏の保存処理について、撥水性シランの含浸処置は場合によっては危険であるという見解を明らかにし、再検討の必要性について述べた。また、沢田は野外における劣化した石造遺構の保存処理工法について、当研究所で考案した減圧含浸工法の原理と応用例を示すとともに、処理用の薬剤やその使用方法に関する問題点を示した。内田は、青銅製品におけるブロンズ病の措置法と、その効果の検討について発表した。

第2日目は、『金銅製冠帽の復原』(町田章・藍原健司)、『鉄器保存の問題』(肥塚隆保)、『木材の収縮とその回復について』(岡田文男)、『PEGの凝固時の木材に及ぼす影響』(沢田正昭)、の研究発表が行われた。町田、藍原は香川県王墓山古墳出土の金銅製冠帽の復原的な保存措置とその過程で明らかになった冠帽の製作技法に関する研究成果を発表した。肥塚は保存処理された鉄器が再びサビを誘発する原因について究明し、その対策と処置方法について述べた。岡田は自然乾燥により変形した出土木材、特に針葉樹材の形状回復法とそれらの保存処理法を紹介し、この種の変形木材については、再処理がある程度まで可能になったことを述べた。沢田はPEGの特性を明らかにし、保存処理後のPEGが木材におよぼす影響と、これに関連する外国における研究状況を紹介し、今後の課題を提起した。

研究発表の総括が行われたあと、保存科学的諸問題の検討会が行われた。『遺跡の保存整備に係る保存科学的な問題点』(安原啓示)、『可塑性人工木材の問題点』(樋口清治)、『漆製品の保存科学的研究課題』(工楽善通)、『処理済出土木材の経年変化』(増沢文武)、『考古学立場から見た金属器保存処理の問題』(町田章)、『沈没船開陽丸関連遺物の保存処理の現状』(藤島一巳)、『緑青サビの除去法について』(沢田正昭)などが話題提供され活発な議論が展開された。

(遺物処理研究室)